
編集後記

2003年の第1号をおとどけします。今回は100頁程度におさまりました。前々号が200頁をこえる大冊肥満号になってしまったことから、多少反省した結果ではありますが、内容は医会雑誌にふさわしいバラエティーに富んだ読んで楽しいものに仕上がったと、編集者一同自負しているところであります。

学会誌と異なり、医会雑誌の立場で扱わなければならない本誌の記事の内容は、きわめて多岐にわたります。しかも単なる透析医療の域をこえて、現在の日本の医療界全体がかかえている諸問題にもふれる必要があります。いわく、医療制度、医療経済、医療保険制度、医療事故、医療サービス、高齢化と介護制度、感染症、危機管理等々、これらの問題の対応に取り組み、斯界の Opiniオンリーダーたる役目を果たすことができれば、いかに大冊肥満になろうともお許しいただけるのではないのでしょうか。(少し力が入りすぎましたか?)

さて今号も各先生方より玉稿をいただきました。巻頭言は、本会常任理事の廣田紀昭先生よりの貴重な御提言でかざることができました。特集「透析医療における Consensus conference 2003」は、日本の透析医療の近い将来についての諸先生の卓見を誌上掲載させていただきました。望まれる医療改革、いまや透析導入者の最大原因疾患となった糖尿病治療及び透析専門医との連携、血液浄化技術の進歩と限界、臓器移植法の成立以来むしろ低調になってしまった日本の腎移植問題、医療保険と医療サービス、いずれも今すぐ問題解決に着手してもはやすぎることではない喫緊のテーマであります。「危機管理対策」は、シリーズで企画され、本誌の御家芸のようになりました。「臨床と研究」の論文は、日常の診療に役立つより実際的な内容のものを選ばせていただきました。「支部だより」は、本会結成15年目の現在、きたるべき経済主導の医療制度改革にそなえて、より一層のパワーアップのために、各支部の充実と会員の拡大を目指している矢先でもあり、各支部からのもっと多数のお便りが望まれます。

最後に、あらためて今号に御寄稿いただきました諸先生に深く感謝申し上げる次第であります。

関野 宏